

研究紀要

縄文の森から

From JOMON NO MORI

創刊号

鹿児島県のナイフ形石器文化後半期の研究
桑波田 武志

遺跡と道跡 ―南九州の縄文時代早期を主として―
繁昌 正幸

縄文時代早期の磨製石鏃について
宮田 栄二

南九州貝殻文系土器の組合せに関する覚え書き
黒川 忠広

石坂式土器再考
前迫 亮一

縄文時代早期の壺形土器出現の意義
新東 晃一

上野原遺跡第10地点検出の「環状遺棄遺構」について
八木澤 一郎

石庖丁の使用痕分析
永瀨 功治

波板状凹凸面牛馬歩行痕説再論
東 和幸

中世山城跡の近世遺物
堂込 秀人

埋蔵文化財情報管理システムの概要と情報公開
高見 憲次

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2003. 3

創刊にあたって

平成4年に開所した鹿児島県立埋蔵文化財センターは、10年を経た平成14年4月、「上野原縄文の森」内に新設移転しました。

北に霧島連山、南に桜島を望む台地上に復元された「上野原縄文の森」は、国指定史跡である上野原遺跡を中心に、当センターのほか、上野原遺跡の出土品や鹿児島県内の考古資料を紹介する「展示館」、さまざまな古代体験にチャレンジできる「体験学習館」などが整備され、“縄文の世界と向き合い、ふれあい、学び、親しむ場”として、オープン以来多くの見学者でにぎわっています。

この「上野原縄文の森」の中核施設である当センターから、このたび、念願の研究紀要が発刊されることとなりました。その名も『縄文の森から』……。鹿児島県の考古・歴史・埋蔵文化財等に関する情報を発信する新たな媒体の誕生です。先人の確かな歩みを今日に活かし、そして未来へ繋いでいく場として充実させて参りたいと存じます。

刊行にあたっては、多くの方々から御支援・御協力をいただきました。心より感謝申し上げますとともに、内容、その他について忌憚のない御意見・御批判をお寄せくださるようお願い申し上げまして、創刊にあたってのあいさつといたします。

平成15年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 井 上 明 文

『縄文の森から』創刊号 目 次

鹿児島県のナイフ形石器文化後半期の研究	桑波田 武志 ----- 1
遺跡と道跡	
－南九州の縄文時代早期を主として－	繁昌 正幸 ----- 17
縄文時代早期の磨製石鏃について	宮田 栄二 ----- 29
南九州貝殻文系土器の組合せに関する覚え書き	黒川 忠広 ----- 37
石坂式土器再考	前迫 亮一 ----- 43
縄文時代早期の壺形土器出現の意義	新東 晃一 ----- 51
上野原遺跡第 10 地点検出の「環状遺棄遺構」について	八木澤 一郎 ----- 61
石庖丁の使用痕分析	永瀨 功治 ----- 73
波板状凹凸面牛馬歩行痕説再論	東 和幸 ----- 81
中世山城跡の近世遺物	堂込 秀人 ----- 89
埋蔵文化財情報管理システムの概要と情報公開	高見 憲次 ----- 101

中世山城跡の近世遺物

堂 込 秀 人

Relics of the Edo Era Excavated from a Hill Fort in the Middle Ages

Dogome Hideto

要旨

県内に841か所現存しているという中世山城跡が発掘調査の対象とされてきて、そのうちいくつかの中世山城跡で近世の遺物が出土している。シラスの削り出しにより作られることの多い南九州の山城跡が、全てではないが現在まで良く保存され、「城山」などと呼ばれ地域の文化財として認識されていることは、幕藩体制下の外城制と関わっているのではないかと考えた。元和の一国一城令以後、廃城されたはずのこれらの中世山城跡が、有事の際には即応できるようになっていたとすれば、外様の雄藩である薩摩藩のしたたかさをうかがうことができる。

キーワード：一国一城令 外城制 御城内山留役

1 はじめに

中世山城跡の発掘調査は、近年文化財保護の観点から進められるようになり、なお現在も範囲確認や保護施策の前段階としての発掘調査や報告書作成が、知覧町知覧城跡、高山町高山城跡、東郷町の鶴ヶ岡城跡、上屋久町楠川城跡、頰娃町頰娃城跡と進められている。宅地造成やシラス取りで、常に破壊の対象となりやすい城跡が、事前に発掘調査されるようになったことは、本県の埋蔵文化財保護の質的な転換の象徴的な事例である。対処療法的な埋蔵文化財保護行政からの脱却である。こうした発掘調査に取り組む市町村の進んで来た道は厳しく、そして今後の歩む道も決して安易ではないが、とにかく一歩踏み出したということである。これらの発掘調査の企画から携われて来た文化財担当者はもちろん、それ以外の周囲の方々の理解・支援がなければならぬことであり、その労苦に対しても心から敬意を表するものである。

さてそれらの成果は着実にあがり、考古学的な成果も大きいものであるが、今回は中世に築城され、使用され、元和の「一国一城令」により廃城したはずの中世山城跡から出土する近世の遺物について考察したい。筆者も串木野城跡の発掘調査に携わったときに、竹林で荒れてはいたが、曲輪や土塁がよく保存されていて、率直に「どうして廃城後ほぼ400年たっているながら、こんなに残りがいいのか」という疑問が生じた。地主でもあり発掘調査に協力していただいた奥田氏や肝付氏の話や作業員として協力していただいた麓の皆さんの話を聞いてみて、城跡への侵入口は奥田氏と肝付氏の居宅のすぐ近くにあり（第1図）¹⁾、だれでも入れる状況ではなかったこと、城跡を通して自らの祖先の人々への敬意と住んでいる土地の歴史性への関心の高さを知った。つまり一朝事が起これば、すぐにも使える城跡

であるのだ。これは教科書的には、幕府の武家諸法度に反し、徳川幕府の諸施策からは信じられないことであった。軍事にも関わることしたことは、口伝されてきても文書としては残らないのが常識であろう。史料がなければ、まさに考古学的な手法が生かされる。ここでは、発掘調査を中心として、中世山城のその後について考察するものである。

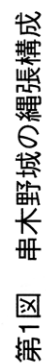
2 鹿児島県の中世山城跡の研究概略（文中は敬称略）

中世山城跡の研究史は詳しくは三木靖による「研究資料よりみた本県の中世山城跡」²⁾にまとめられている。近代に多くの郷土史家によって戦国の人物研究からのアプローチがあったが、ここでは中世山城跡という遺構に絞り、近年のものを中心としておもなものを述べさせてもらいたい。中世山城跡の調査は、史料研究と縄張り研究、発掘調査の3つの柱があると考えられる。

史料研究においては、五味克夫が伊作城跡をはじめとして、建昌城跡などを取り上げ、県・市町村教育委員会の実施する発掘調査の多くにも、史料からの考察をおこなった³⁾。城に関係する史料と、その地域の同時代の史料をあげて、はやくから発掘調査の成果と比較検討されながら、周辺地域の歴史像を説き明かして、中世史への位置付けをおこなった。このほかに中野翠による高山城や南郷城の研究や⁴⁾、三木靖による平山城の研究などがある⁵⁾。河野治雄は、近世までの史料を検討し、谷山城と地域の歴史を語っている⁶⁾。このなかで河野は、発掘調査の成果から、「外城」とよばれる近世の麓の、「谷山郷」へ地頭所が移るまで、近世前半に山城である谷山弓場城を使用していた時期があったと述べている。

縄張りについては1932年に林吉彦が清水城跡を中心とする研究⁷⁾の中で、清水城跡、東福寺城跡、高山城跡などに

90



ついて縄張りを論じた。鹿児島県における中世山城跡の最初の実地調査の記録である。その後福田信男は薩摩郡内の城跡を踏査し、実測図・見取図・鳥瞰図を作成し⁸⁾、薩摩郡内の127か所の城跡について実測図を作成したといわれる。現在は全城の解説と33ヶ城跡についての実測図・見取図・鳥瞰図の付された復刊本が活用されている。位置・現状・文献・備考として各城跡が整理され、広域な城域を認識し、周辺地形への視点や遺構への考察を行った画期的な調査記録である。城跡の調査と保存の必要性を繰り返して述べ、調査・保存への地元当局の支援を訴えかけている。時は過ぎても、現在の文化財保護にたずさわるものとして肝に銘じたい。その後1970年代後半から三木靖を中心として研究がなされ、三木は楠川城跡・吉田城跡・大口城跡などを初めとして、多くの城跡を踏査し縄張り図を作成するとともに、その歴史的な位置付けを行った⁹⁾。発掘調査においても縄張り図は開発との調整や調査地点の選択等で欠くことのできない資料である。

五味克夫・三木靖を中心とするこれらの研究は、時を同じくし増加して行く開発事業に伴う発掘調査の成果とあいまって、中世山城跡は総合的に考察されることとなった。

本県の城館跡について現地踏査の成果を含めて所在地・城主等の一覧表を作成し集成したものに、小幡晋¹⁰⁾や三木靖¹¹⁾がまとめたものがある。

昭和57年(1982)から61年まで行われた県教育委員会文化課の企画による県内の中世山城跡の悉皆調査は全国的にも注目される調査であった¹²⁾。これは全市町村に文献調査・遺構調査・伝聞調査について98頁～99頁のような調査カードを配布し、各市町村に1～3名の調査員を委嘱し、またその下に調査補助員や調査員助手をおいて、城跡毎に調査カードの項目の調査をしてもらう。指導委員会と文化課職員が指導・助言しながら調査を実施し、作成した調査カードを基本台帳として保管し、城跡の保護のための基礎資料とする。また調査報告書を作成して関係機関に配布するものであった。この結果県下944か所の城跡の調査を行い、841か所が現存するとした。この基本台帳は調査カードを作成し、詳細にわたって山城跡についての記述があり、調査当時の現状をあらわす写真等も添付してあり、市町村にとっても重要な資料である。これにより中世山城跡の城域の把握がなされ、市町村内の中世山城跡の認識が高まり、調査員として中核となった文化財保護審議委員会が活性化するなどの成果があった。一方で行政資料としての遺跡地図への書き写しが進まず、調整に齟齬が生じることもあった。現在は遺跡地図のGIS化が図られ、区域を示してある。市町村においても調査カードは保管されているはずであるが、もしなければ県の基本台帳から早急に複写しておくべきであろう。

1980年代になって城跡の発掘調査が増加してくる。シラス採取により消滅の危機にさらされた平泉城跡の発掘調査は、

その遺構の残存状況の良さが注目された。1980年～81年に調査された苦辛城跡では、広大な山城域のほとんどを調査域とし、ほとんど全域を伐採し、露出した地形に応じた調査がなされた。水溜遺構や小さな帯曲輪、曲輪の関係性の把握等全面の調査の有効性を示した。全体を地形測量し、山城の使用時期、改修状況、正確な曲輪の形や配置、建物跡や柵列・空堀や道や虎口などが、空間として関連づけられながら位置付けられた。その後鹿児島県で発掘調査された中世城跡の報告書を年代順で古い方から並べると以下のとおりである。

- 1 1977 加世田市教育委員会『村原(梶ノ原)遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書
- 2 1979 鹿児島市教育委員会『大龍遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 3 1980 加世田市教育委員会『上ノ城跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- 4 1981 鹿児島県教育委員会『中尾田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
- 5 1981 鹿児島県教育委員会『加栗山遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(16)
- 6 1982 大口市教育委員会『平泉城跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 7 1983 鹿児島県教育委員会『苦辛城跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(27)
- 8 1984 河口貞徳・本田道輝「廻城一落城と出土遺物」『鹿児島考古』第18号鹿児島県考古学会
- 9 1984 川辺町教育委員会『平山城跡』川辺町埋蔵文化財報告書(1)
- 10 1985 国分市教育委員会『城山山頂遺跡』国分市埋蔵文化財調査報告書(2)
- 11 1987 加世田市教育委員会『村原(梶ノ原)遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- 12 1987 鹿児島県教育委員会『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(43)
- 13 1987 横川町教育委員会『横川城跡』横川町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 14 1988 伊集院町教育委員会『一字治城跡』伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 15 1989 鹿児島市教育委員会『鹿児島市の中世城館跡』鹿児島市文化財調査報告書(6)
- 16 1989 鹿児島県教育委員会『下伊倉城跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(50)
- 17 1990 伊集院町教育委員会『一字治城跡』伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 18 1991 始良町教育委員会『建昌城跡』始良町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 19 1991 伊集院町教育委員会『一字治城跡』伊集院町埋蔵

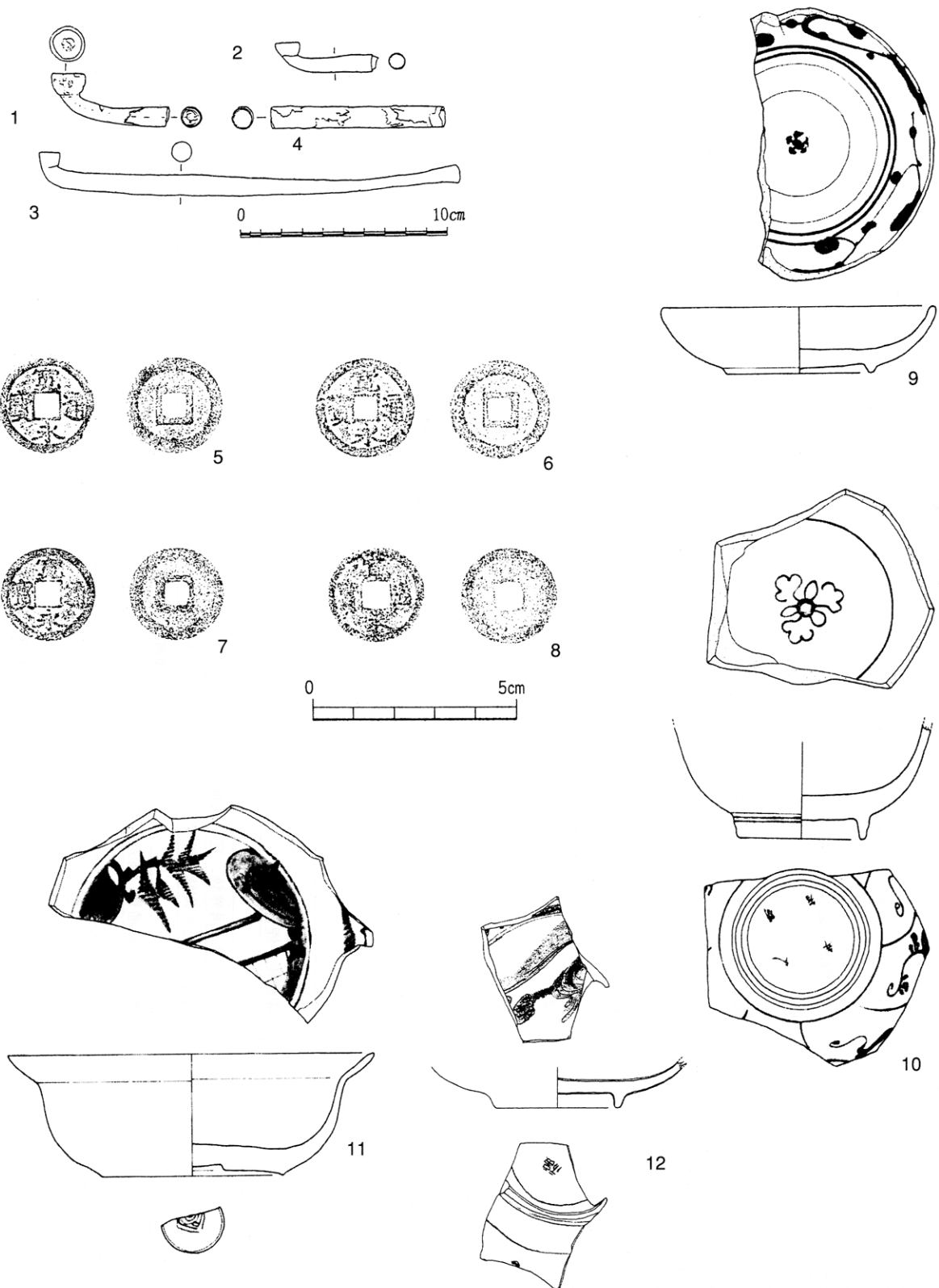
- 文化財発掘調査報告書（５）
- 20 1992 鹿児島市教育委員会『谷山弓場城跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（11）
- 21 1992 鹿児島市教育委員会『清水城跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（16）
- 22 1992 知覧町教育委員会『知覧城跡』知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書（３）
- 23 1992 蒲生町教育委員会『蒲生城二之丸跡』蒲生町埋蔵文化財発掘調査報告書 1
- 24 1992 伊集院町教育委員会『一字治城跡』伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書（６）
- 25 1993 金峰町教育委員会『牟礼ヶ城跡』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）
- 26 1993 知覧町教育委員会『南別府城跡』知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）
- 27 1993 鹿児島市教育委員会『谷山菊地城跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（17）
- 28 1994 鹿児島県立埋蔵文化財センター『本御内遺跡（舞鶴城跡）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（12）
- 29 1994 鹿児島市教育委員会『川上城跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（18）
- 30 1994 伊集院町教育委員会『一字治城跡』伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書（８）
- 31 1994 知覧町教育委員会『知覧城跡（二）』知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書（５）
- 32 1994 串良町教育委員会『稲村城跡』串良町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）
- 33 1994 始良町教育委員会『始良町中世城館跡』始良町文化財調査報告書（１）
- 34 1994 鹿児島県考古学会「鹿児島県の中世山城」『鹿児島考古』第28号鹿児島県考古学会
- 35 1994 宮之城町教育委員会『松尾城及び宗功寺跡（発掘調査の概報）』宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）
- 36 1995 加世田市教育委員会『別府城跡』加世田市埋蔵文化財報告書（10）
- 37 1995 鹿児島県立埋蔵文化財センター『平松城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（13）
- 38 1995 鹿児島県立埋蔵文化財センター『本御内遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(14)
- 39 1995 宮之城町教育委員会『松尾城及び宗功寺跡（２）』宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書（５）
- 40 1997 鹿児島県立埋蔵文化財センター『本御内遺跡Ⅲ』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（17）
- 41 1997 宮之城町教育委員会『松尾城及び宗功寺跡（３）』宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書（７）

- 42 1997 市来町教育委員会『鍋ヶ城跡』市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）
- 43 1997 鹿屋市教育委員会『鹿屋城跡』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（53）
- 44 1998 鹿屋市教育委員会『鹿屋城跡（Ⅱ）』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（54）
- 45 1999 吹上町教育委員会『亀丸城跡』吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書（13）
- 46 1999 薩摩町教育委員会『中津川城跡』薩摩町埋蔵文化財発掘調査報告書（２）
- 47 1999 出水市教育委員会『松尾城跡』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書（10）
- 48 1999 鹿屋市教育委員会『谷平（Ⅷ）遺跡・鹿屋城跡（Ⅲ）』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（57）
- 49 2000 鹿児島市教育委員会『鹿児島（鶴丸）城二之丸跡G地点』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（28）
- 50 2000 鹿児島市教育委員会『谷山城跡E地点』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（31）
- 51 2000 市来町教育委員会『上城・詰城跡』市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（７）
- 52 2000 串木野市教育委員会『串木野城跡』串木野市埋蔵文化財発掘調査（２）
- 53 2000 東郷町教育委員会『鶴ヶ岡城跡』東郷町埋蔵文化財発掘調査報告書（５）
- 54 2000 大隅町教育委員会・（財）元興寺文化財研究所『日輪城（恒吉城）跡』大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（20）
- 55 2001 鹿児島市教育委員会『大龍遺跡第7次・第8次』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（32）
- 56 2001 鹿児島市教育委員会『大龍遺跡B地点』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（34）
- 57 2002 始良町教育委員会『建昌城跡』始良町埋蔵文化財発掘調査報告書（８）
- 58 2002 鹿児島県立埋蔵文化財センター『松尾城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（42）

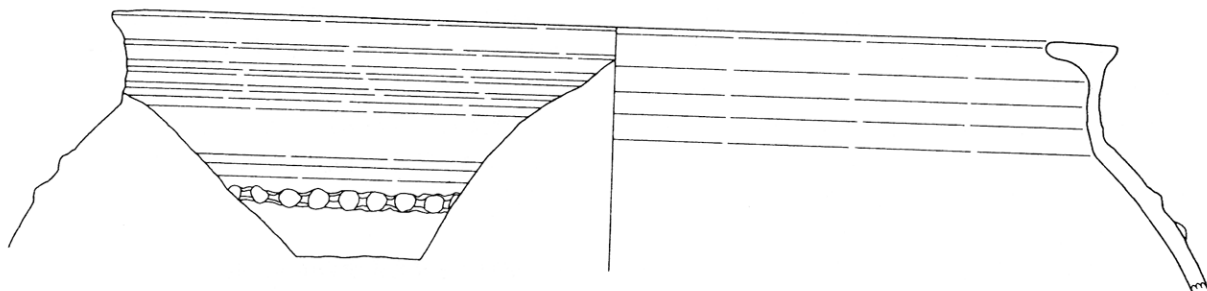
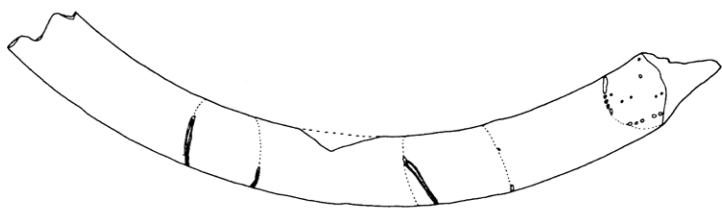
県内ではシラス採取や宅地造成、また治山工事等に伴う発掘調査が日常的に行われている。これらは小規模であったり、発掘費用の原因者負担が困難であったり、崖上や崖下のため調査が困難であったり、調査そのものの以外のことでも膨大なエネルギーを費やすことが多かった。開発の把握や、開発者との調整、発掘調査の範囲等で、いわば受け身の発掘調査から踏み出そうとした取り組みに、分布調査による城域の明確化と周知化、文化財保護サイドが主体的に行う中世山城の範囲・性格の確認調査がある。前者の分布調査は始良町・鹿児島市の取り組みであり、後者の確認調査が串木野城（串木野市）・鶴ヶ岡城（東郷町）・楠川城（上屋久町）・額娃城（額娃町）・赤木名グスク（笠利町）など

城 跡	市町村	外城(備)	近世遺物	遺物・遺構の中心時期(世紀)	備 考	文 献
川上城跡	鹿児島市	×	なし	14～16	近世染付採集、古石塔(近世)有	5・29
清水城跡		○	煙管、寛永通寶2、陶磁器類(薩摩焼等)	15～16中		2・21・55・56
苦辛城跡		×	寛永通寶3	13末～16	墓	7
谷山城跡	尾守ヶ城跡	○	肥前陶器、薩摩焼、寛永通寶3	14中～16	本城、弓場城、菊地城	20・27・50
尾守ヶ城跡		×	なし	12～13・15～16		1・11
上ノ城跡		×	なし	13～16中		3
別府城跡	加世田市	○	肥前陶器、薩摩焼、琉球陶器	12～17世紀でⅢ期		36
鹿屋城跡		○	近世磁器	15～16		43・44・48
串木野城跡		○	清朝染付(19初)、寛永通寶	15後葉～16前半・16後半	鉄砲玉	52
松尾城	出水市	×	なし	14～15 箱掘16		47
国分新城跡	国分市	○	陶磁器	16～17		10・28・38・40
平泉城跡	大口市	×	なし	14～16でⅢ期 15中～16中中心		6
建昌城跡	始良町	×	煙管(18世紀) 寛永通寶3	15後半		18・57
知覧城跡	知覧町	○	染付、薩摩焼	14～17初		22・31
南別府城跡	×	×	寛永通寶2(塚出土) 清朝染付、肥前陶器、薩摩焼	18	近世屋敷跡	26
蒲生城	蒲生町	○	なし	15	二ノ丸伝薬師寺跡	23
牟礼ヶ城跡	金峰町	×	なし	14	二階堂氏	25
一字治城跡	伊集院町	○	薩摩焼	12後半、南北朝、16世紀		14・17・19・25・30
鍋ヶ城跡	市来町	×	なし	14～15		42
上城・詰城跡	×	×	なし	13～14	鉄砲玉	51
亀丸城跡	吹上町	○	なし	13～16		45
片城跡	横川町	×	寛永通寶	13～16	近世墓	4
横川城跡	○	○	薩摩焼、煙管	15後半～16		13
廻城	福山町	×	なし	13、14～15	武器、大太刀、和鏡等の一括埋納	8
平山城跡	川辺町	○	近世染付、薩摩焼、寛永通寶3	14末～16		9
松尾城	宮之城町	×	薩摩焼、肥前陶器、煙管	17～18 炉跡・建物跡	宗功寺の関連	35・39・41・58
中津川城跡	薩摩町	×	なし	鎌倉・縄文時代早期		46
鶴ヶ岡城跡	東郷町	○	煙管、洪武通寶(加治木銭)、染付	16前～半ば		53
下伊倉城跡	東串良町	×	なし	16	高山城の外城	16
稲村城跡	串良町	×	寛永通寶	15	近世墓	32
平松城跡	末吉町	×	なし	16		37
日輪城跡	大隅町	×	なし	16前～半ば	鉄砲玉・炉状遺構	54

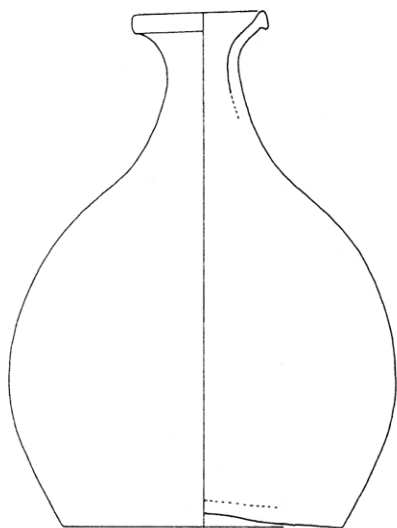
第1表 中世山城跡近世遺物出土一覧表



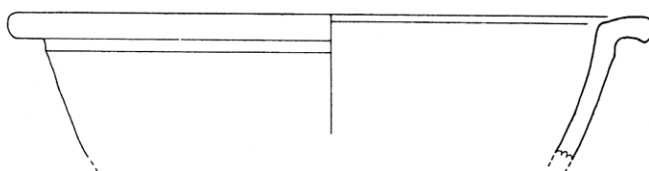
第2図 中世山城跡出土遺物 (1)



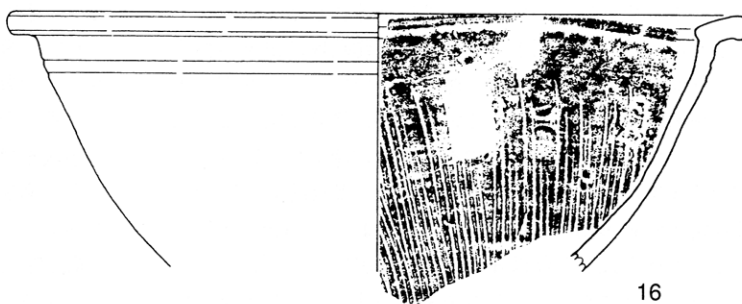
13



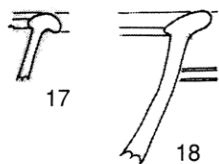
14



15

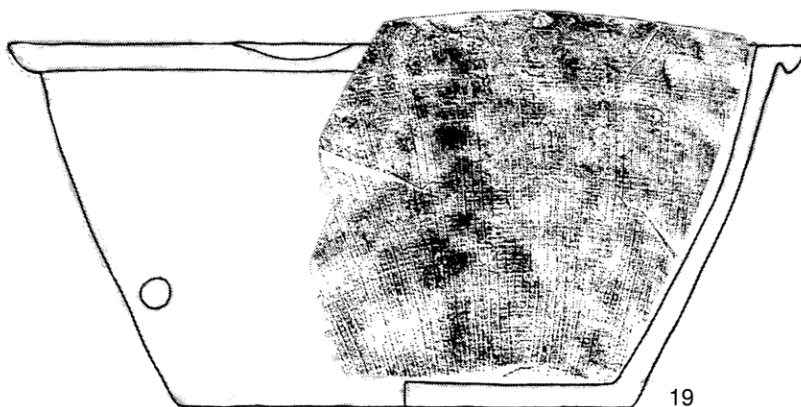
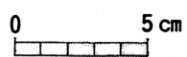


16



17

18



19

第3図 中世山城跡出土遺物 (2)

の取り組みであった。さらに名瀬市のグスク分布調査では多くのグスクが確認され、新たな視点を提供している。

3 中世山城跡出土の近世遺物

中世山城跡に最後の手が入られるのは、関が原の戦いに破れ、徳川幕府の南下に備えたものであるという。もちろん841か所がすべてではなく、交通の要衝で、地域の本城として重要視され、戦国期に使われたものを中心であろう。串木野城は16世紀末以降に最終的に造成され、そのまま残された可能性がある¹³⁾。また薩摩藩が兵農分離を進め家臣団を再編成する際に、当初は中世山城跡の大手口付近に有力家臣群が配置されたことが、出水市の亀ヶ城跡にみられ¹⁴⁾、国分市の国分新城跡の「国分郷屋形跡」とある古地図には重臣たちが国分新城の城内に住んでいた時期がある¹⁵⁾。蒲生麓の成立期においても、蒲生城の城山の麓の三の丸の迫地区において居住し、今日の役場付近の麓に移ったのは享保の年代と思われることから¹⁶⁾、初期の外城形成期にあつては、戦略上の要地の城についての防備は確実に受け継がれて行くことが示されている。17世紀の前半の遺物は出土する可能性があるということである。

第1表は発掘調査された中世山城跡で出土した近世遺物についてまとめたものである。発掘調査の規模については、部分的なものが大部分である。発掘調査の規模や調査地点・曲輪などによって一様に遺物が出土するものではないが、寛永通宝・煙管・薩摩焼・肥前陶器、清朝染付などが出土している。麓を形成した山城跡で近世遺物が出土していることがわかる。第2図1～4は始良町建昌城跡出土の煙管で、18世紀代のものである。煙管については、三垣恵一が出土地名表を作成し考察している¹⁷⁾が、煙草を吸うようになったのは16世紀末頃からであることが確実で、県内では17世紀後半からのものが出土している。寛永通宝(5～8)は初鑄年が寛永13年(1636)とされており、1636～1659年までの古寛永銭とそれ以降の新寛永銭がある¹⁸⁾。背に「文」字のはいる文銭や、もっとも多量に鑄造された18世紀中頃のもの新寛永銭である。古寛永銭と新寛永銭のどちらも出土している。第2図は宮之城町松尾城跡出土のものであるが、5・6・7が古寛永銭で、8が新寛永銭である。薩摩焼は黒物の甕やすり鉢等を中心とし、18世紀台がもっとも多い。薩摩焼の摺鉢については、渡辺芳郎により、編年観がまとめられている¹⁹⁾。第3図13・14は松尾城跡出土の徳利と貝目をもつ甕である。この甕は串木野城跡でも出土している。摺鉢は渡辺の仮称3型式(15～18)と4型式(19)で、松尾城(16)と加世田市別府城跡(15)、鹿児島市谷山城(17～19)のものである。仮称3型式は18世紀代に、仮称4型式は19世紀代とされる。肥前陶器は9～11は別府城跡出土のもので、12が東郷町鶴ヶ岡城跡出土のものである。9は波佐見系の染付で、内側につる草文、見込に蛇の目状の釉はぎが見られ、その内に五弁花文がある。10は外側に

仙芝祝寿文、高台内側に大明年製が描かれている。11は蛇の目高台の内側に「渦福」があり、口縁部内側に草文を描く。12は高台内側に「福」字文がある。これらは18世紀代のものである。このほかに火舎や石臼が出土することもあり、遺物からは近世の時期に城跡内にいて、簡便な生活がおくられたことを窺わせるものである。煙管・寛永通宝については、畑仕事や山仕事での一服や紛失品、近世墓の副葬品の可能性も捨て切れないが、谷山城・串木野城・知覧城・別府城等では、併せて陶磁器等が出土してくることから、短期間にしろ居続けたことがわかる。

(出土遺物の資料の引用は各中世山城の報告書からであり、註は省略)

4 史料から見た近世の中世山城

中世の山城のうち、近世薩摩藩の外城制度に組み込まれたものも多い。外城制度とは本城を中心として、領内各地に支城を配置し防衛拠点とし、且つそれを中心とする内政上の区画を設けたものである。麓の武士が軍団を形成してそのまま地頭の指揮で動員される。藩政初期には軍事的機能に重点が置かれ、その後は政治・交通の便により、新しい外城や麓の形成もおこなわれた。その城砦施設は一国一城令とともに全廃したが、城跡はいずれも城山あるいはお城と呼ばれ、猶ほ有事の際は利用されるべきものであつた²⁰⁾。鹿児島県の中世山城跡については、藩政期にも関心が寄せられていて、関連する資料が三木靖によりまとめられている²¹⁾。元和元年(1615)「一国一城令」の後に、寛永十年(1633)幕府巡見使小出吉親らの「一国一城令」に違法の疑いとの質問に家老川上久国が「太閤下向の際に領国が減じ、そのため武士がもどってきて人が増え、米が乏しく、古小城を壊すと田畑を埋め人民が飢える」との申し開きをした。窮屈な経済事情が理解され、外城制度が黙認されたとある²²⁾。

藩政期の関心の高さは、古城等の旧跡としての史料にみられ、文政7年(1824)の「薩藩名勝誌」²³⁾に古城として61ヶ城を数え、寛政元年(1789)の幕府上使への答申書には「國中古城之事」26ヶ城が上げてあり、「當分ハ山野之躰ニ候」としている²⁴⁾。天保14年(1843)編集の『三国名勝図会』²⁵⁾のなかで、各郷の城跡をとりあげ、本県のみで292ヶ城が掲載されている。個別の城跡について元禄12年(1699)「吉田松尾之城」の絵図²⁶⁾、元禄12年(1699)川辺町平山城についての「川邊大境并内縄引帳」²⁷⁾や、同じく元禄12年の「國分新城綱引帳」²⁸⁾の写しが残っている。寛政四年(1792)『名所旧跡御札方取調帳留』には知覧城の城郭の範囲面積、本丸の高さ、曲輪の呼称や配置が記される²⁹⁾。また天保5年(1834)3月に写された「蒲生龍ヶ城跡」の絵図などが残されている³⁰⁾。加えて、『蒲生士族共有社其源』のなかに「御地頭御問条写」があり³¹⁾、慶応元年丑正月(1864)に答申した文書を慶応二年寅五月に写されたものに、防戦時

のことを問われた内容がある。この中に、「蒲生本城は壊れたところがない」ことや、「帖佐の平安城に集まって防ぐ」「山田の篠原城で防ぐ」「愛宕山の永福ヶ城で防ぐ」との記述があり、これは蒲生のみならず、各郷の地頭に下問されたものと考えられる。幕末の緊張状態の史料ではあるが、江戸時代を通して本城の他の山城が認識されていた。これらから江戸時代をとおして地元の郷士たちが中世山城跡について十分認知していたことを示している。

「當分ハ山野之鉢二候」は一国一城令をはばかり、あくまで公的なものであって、外見上はそうであっても、城の諸施設の崩壊につながるものについては、手を入れて来た可能性が強いと考える。

このように中世山城跡についての認識は十分持ち合わせているなかで、中世山城跡である城山の管理をしていたかであるが、以下の史料がある。

蒲生麓は出水麓ともに、おおきな外城であるが、その『御仮屋文書』の中の「蒲生衆中高帳」³²⁾にみえる諸役のなかに、元禄7年(1694)・正徳元年(1711)・元文3年(1738)にそれぞれ御城内山留役がみられ、役高が記されている。また国分新城についても、前出の『国分諸古記』の中の元禄12年の「國府新城縄引帳写」に「新城山留衆」とある³³⁾。薩摩国山崎郷では『山崎御仮屋文書』慶応4年(1868)に、「御城見廻人」がみえる³⁴⁾。これらの史料から、郷士の所役に「城山見廻」があり³⁵⁾、城山の維持・管理が郷士の職務として存在していた。

管理においては、鹿児島県立図書館所蔵の「薩藩御城下絵図」に(鹿児島)城山に番所があるか³⁶⁾、一時はこれと同じような番所や仮小屋を設けて管理し、それが「山留役」「山留衆」として職名に残存していったのではなかろうか。このため前章で述べた近世の日常品が残されることとなった。

5 まとめ

中世山城跡は、元和の一国一城令を受けても、破城とされず、そのまま一部は麓集落に取り込まれて管理されていく。シラスの丘の切り込みを中心に土塁・曲輪・空堀等を作り出す作業は、他地域の石垣や土塁などの中世末の城郭とは異なって構築や改修が容易であり、破城の痕跡も明白ではなかったと考えられる。放置すれば、山野と化し、城としての機能を失ったかに見える。曲輪や土塁の木々や土壌の発達、地滑りの原因となり、さらに放置すれば曲輪縁辺の土塁は次々と崩壊していくものと考えられる。しかしながら現在残る中世山城跡は、高い土塁を残し、深い空堀を有し、曲輪もよく残存している。崩壊につながる大きな雑木の伐採など少なからず管理され続けた。明治維新について、薩摩藩の郷士数の多さが、兵の徴集・編成を容易にしたといわれるが、つねに軍事的な拠点を認知しながらシュミレーションされていたのではなかろうか。重要な中世山

城跡については、江戸時代前期については仮小屋等を設置し、その後は郷士に所役を残して管理をおこなってきた。そのため外城制度に組み込まれた中世山城跡においては、近世遺物が出土するのである。

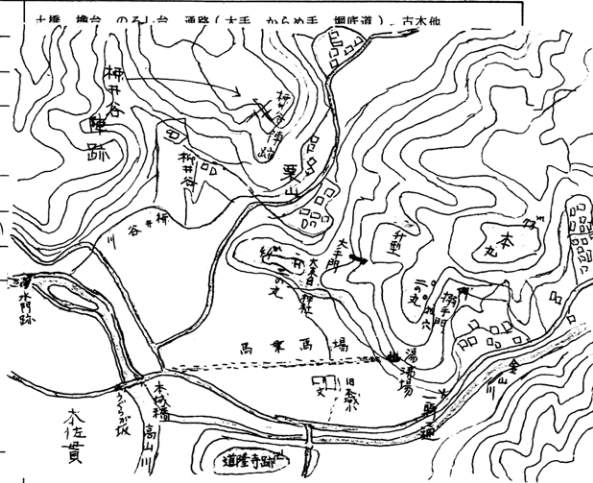
外城制度の麓集落の中の中世山城跡は地域の伝統の証しであり、郷士の精神的な紐帯として近現代も機能しつづけてきた。そのため残存している多数の中世山城は、交通の便や立地に恵まれた城跡もありながら、いまだに現代の諸開発から守られ続けて来たのである。はじめに述べた串木野城跡の奥村氏・肝付氏が、警察・司法をつかさどる横目の職家にあったことは偶然ではない。

中世山城跡の発掘調査は、中世山城が広大な城域をもつことから、ほとんどが諸開発事業にあつては部分的とならざるを得ない。小規模・部分的な発掘調査だからこそ、明確な目的意識をもたなければ、発掘調査自体が破壊の免罪符的役割としかならない。これらの発掘調査はいずれ成果としてまとめられ、住民に総合的に歴史的に呈示されなければならない。そうでなければ城跡の歴史性や重要性が認識されずに、開発にさらされ、消え行くのである。城跡は城域全体の把握が必要であり、災害や治山事業等により止むおえない場合も多いが、諸開発によって切り取られ、全貌が把握されることもなく、市民に歴史が語られる事なく消滅してしまうことを危惧しているところである。史料収集や古文書等の解釈に、県歴史資料センター黎明館の栗林文夫氏に特にお世話になった。出水市の岩崎新輔氏・宮之城町の川添俊行氏・知覧町の上田耕氏・鹿児島大学埋蔵文化財調査室の新里貴之氏にも資料収集等で協力を得た。記して感謝したい。なお、近世遺物については、黙殺され報告書に掲載されていない可能性もある。出土していないとした中世山城跡から出土していることもあるだろう。主要でない遺物から、別の時代の重要な資料や、別の機能を暗示する可能性もあり、資料の扱いについては十分な検討が必要であろう。史料の引用が原典からのものでなく、郷土誌や引用文献・報告書からの引用になってしまった。近世文書への不勉強のためだが、どうか御寛願したい。

【 註 】

- 1 上田 耕 2000 「串木野城の城域と構成」『串木野城跡』串木野市教育委員会
- 2 三木 靖 1987 「研究資料よりみた本県の中世山城跡」『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会
- 3 五味克夫 1967 「伊作城跡」『(鹿児島)中世史研究報』第7号 鹿児島中世史研会 1971 「建昌城の史料」『中世史研究会報』第30号 鹿児島中世史研会 など
- 4 中野 翠 1984 「中世高山城と肝付氏について」『鹿児島の歴史と文化』鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 5 三木 靖 1984 「平山城の変遷—応永24年合戦を中心として」『平山城』川辺町教育委員会
- 6 河野治雄 1992 「谷山氏の時代と谿山郡の歴史」『谷山弓場城跡』鹿児島市教育委員会
- 7 林 吉彦 1932 『考古学上より見たる清水城跡』極東孔版
- 8 福田信男 1937 「薩摩郡に於ける古城址の調査」(川内郷土史研

記入不要	整理番号	74-7
	関連する城館番号	8224.2.32
1 名称	国指定史跡 高山城跡 (他の名称 肝付城、山城、本城)	
2 所在地	現在 市 区 高山 町 肝付郡 高山町 新富村 (旧<明治20年以前> 町 新富 村大字 新富)	
3 遺構	現 a 占地状況 (山頂, 山麓, 丘陵, 平地, その他) b 現況 (山麓, 水田, 畑, 寺社境内地, 宅地, その他 (水田, 生地, 草生)) c 所有関係 国有地, 公有地, 区有地, 寺社有地, 私有地 ()	
3 遺構	d 残存状況 (良) やや良, 不良, 消滅 e 史跡他指定 (国・県・市・町・村) (史跡)・旧跡・重要遺跡 f 他の法律・条例との関係 都市計画法 (市街化区域, 市街化調整区域, 風致地区) 等 環境保全条例 (なし), 森林法 ()	
3 遺構	存 g 当面予定されている開発計画 有 () (無)	
3 遺構	度 h 管理状況 陽良好. 五九年度より, 県に本格的調査決定. i 破壊のある場合 全壊, (部分等) (時期 (終戦後, 頃); 原因 (食糧増産, 道路河川の改修, 共有地と私有化)) 合 食糧増産, 道路河川の改修, 共有地と私有化 ()	
3 遺構	j 遺構の特色 (郭<呼称>, 腰郭<郭郭>, 犬走り, (堀 (空堀, 水堀, たて堀), 堀穴 (二つ) 環濠, 残存)) (土塁<折れ目>, 土塁, 石塁, 虎口, 水の手<井戸>, 庭園, 池, 礎石, (二見))	



3 遺 構 の 状 況 そ の 二	三方は山に囲まれ南部と西部は川に沿い、千尋の谷とて天の倉の名域と云ふ。 本丸二の丸、三の丸、大寺門、本願寺門、行形、茶室(湯沸場)跡、馬寮馬場、土小石等、等々残る。		③ 地質図	④ 金石文	⑤ 古地図	⑥ 地籍図
	地籍図(公園・切取)上の特色		所誌	備考 (刊行年)	考 (刊行年)	考 (刊行年)
4 研	執筆		① 地(明治以降) ② 著書 ③ 論文 ④ 報告書 ⑤ その他			
	究		① 地(明治以降) ② 著書 ③ 論文 ④ 報告書 ⑤ その他			
5 史	備考	発掘、調査	大字 小字 小字内の呼称(通称、小名、さげ名)、屋号 新田 倉田 宇都 平 南 長迫 深田 玉野 旗 下 野首 沢子 明 江 松尾 平石 中川原 坂下 西田 川 山 高田山 高田山 高田山			
	文獻	史	① 古文書 ② 古記録			
料 そ の 一	高山名勝志 三田名勝志 地理纂要		文政七年閏七月 天保十四年十月 明治四年正月			

鹿児島県教育委員会

資料1 中世城館跡分布調査調査カード記入例 (1)

5	d	遺物（陶磁器、武器、武具、焼米、鉾澤、古銭、すずり、糸臼、木製品他）	
史料			
その二	e	その他	
6	a	交通路（險路） 	
歴史	b	商業関係（市）	
	c	手工業関係（鉾澤、鍛冶、組屋、番匠く大工）その他）	
状況	d	農業関係（  ）	
祝	e	宗教、信仰！	



大来目神社

天正二年(1574年)の創建。一説には築城の際、
城の鎮神として創建とも伝える。社殿は石祠。
石段四十段。



道隆奇跡の唐崖傳
三丁余基云々
現在は、基を存、周圍には鎌倉類、古石塔
寛元四年(一二八六)肝付氏代表員の時、十一觀音寺
本尊といふ。
開基を西蜀の蘭茂など(五仙)南方善像。
建長元年、京都へ、編輯鎌倉へ、編輯建長寺を建立。
奉納鐘二枚(天竺四丁二月二十八日、お南御前の寄進)
等。

7	城 名	筑城に就いては三説がある	性	恒久的の城郭、臨時城郭
考	築城時期	① 永観二年...伴善行説(984年) ② 長元九年...所付初代兼俊説(1036年)	格	密接な関連をもつ城郭(大形城・花寄陣・小形陣・大腸城・弓張城・合戦田陣・検見崎城・和国城等)
a	存続期間(築城から廃城まで)	③ 南北朝時代(正平6~7年間(1351~1352年))	b	
歴	① 高山右衛門志(永観二年(984年)より天正二年(1574年)まで) ② 名勝国会(長元九年(1036年)より(兼俊が)590年間 19代、545年間、前後兼俊一説に613年というところ ③ 地理集考(兼俊一説には兼俊、兼道記(主白四十五年間)	機	軍事的のみで 所付落城後は城砦としての役目は果たしたとは思われない、 中心は麓の設置で、寄馬場を中心とした南北への馬場が七通りあり 地政仮屋が現在の若小小学校の場所が設けられ、289年間に亘り 本、おに鉄砲の伝来と普及は、戦術にも12一変して 本城よりいっ、多張城(城山)が中心となり、その周囲に郷士の 屋敷が設けられた。	
史	4 主要居城者(城主の変遷)	長元 元正 ※ 所付初代 兼俊より十八代 兼道(1036~1580) 544年間。 ① 兼俊→② 兼経→③ 兼盛→④ 兼石→⑤ 兼藤→⑥ 兼前→⑦ 兼重 ⑧ 兼重→⑨ 兼元→⑩ 兼忠→⑪ 兼盛→⑫ 兼俊→⑬ 兼経→⑭ 兼盛 ⑮ 兼盛→⑯ 兼道	能	
	5 築城から廃城まで城郭に加えられた変化(拡張部分等)	不明	(配入自由)	
	6 主な事件	① 五代 桂山城は始めの居地跡。墓は西側にあり。朝廷に征伐に参加 ② 十四代 島津國昌は用水工事や竣工し、名地守護として名を留めている	日領の民主支配の観点からみて 本城の東部(安田)二ツ丸の南部、西部の末峰、本城下(木佐貫)に 土屋敷があつたとはいへる (西田 邦吉)	
報告者氏名	北 園 博	調査年月日	昭和五十九年三月十一日(日) 晴	

- 研究会 1987復刊)
- 9 三木 靖 1980 「屋久島の楠川城」『歴史読本』第25巻 第15号 新人物往来社
 - 1982 「吉田松尾城の研究－その変遷及び縄張りについて－」『鹿児島短期大学研究紀要』第3号
 - 1983 「大口城跡の絵図と縄張図」『鹿児島短期大学研究紀要』第31号など
 - 10 小幡 晋 1974～76 「大隅・日向古城址名禄」『大隅』第17～18号大隅史談会
 - 11 三木靖編 1979 「鹿児島県」『日本城郭大系』第18巻 新人物往来社
 - 1981 「鹿児島県主要城跡一覧」『鹿児島大百科事典別冊』南日本新聞社
 - 12 鹿児島県教育委員会 1987 『鹿児島県の中世城館跡』
 - 13 串木野市教育委員会 2000 『串木野城跡』
 - 14 『出水諸家系譜集』『志賀氏系図』『出水市郷土誌』p 308 1968
 - 15 国分市 1973 『国分郷土誌』p 252
 - 16 蒲生町 1991 『蒲生郷土誌』p 264 文政9 (1826)
「地頭仮屋棟札」による
 - 17 三垣恵一 2000 「鹿児島県内出土の煙管について」『大河』第7号
 - 18 川根正数 1995 「寛永通寶銭の基礎的研究1 (上)」『出貨』第4号出土銭貨研究会
 - 1996 「寛永通寶銭の基礎的研究1 (下)」『出土銭貨』出土銭貨研究会 第5号
 - 19 渡辺芳郎 2000 「近世薩摩焼摺鉢考」『鹿児島考古』第34号 鹿児島県考古学会
 - 20 鹿児島県 1940 『鹿児島県史』 第二巻
 - 21 註2と同じ
 - 22 原口虎雄 1981 「外城制度」『鹿児島大百科』南日本新聞社
「川上久国雜記」よりの引用とある
 - 23 註2より 1824 「薩藩名勝誌」による
 - 24 『藩法集8 鹿児島藩上』『島津家列朝制度』巻之6 創文社 1969
 - 25 『三国名勝図会』天保14年編集 明治35年 (1905) 刊
昭和57年復刊 青潮社
 - 26 三木 靖 1982 「吉田松尾城の研究－その変遷及び縄張りについて－」『鹿児島短期大学研究紀要』第30号
 - 27 川辺町教育委員会 1984 『平山城跡』、町立図書館に保管
 - 28 「國府新城縄引帳写」『国分諸古記』『国分郷土史資料編』1997 国分市
 - 29 知覧町教育委員会 1992 『知覧城跡』
 - 30 蒲生町 1991 『蒲生郷土誌』p 216
 - 31 「御地頭御問条写」『蒲生士族共有社其源』『蒲生郷土誌』p 379 1991 蒲生町
 - 32 「蒲生衆中高帳」『御仮屋文書』『蒲生郷土誌』p 219 1991 蒲生町
 - 33 註28 p 225
 - 34 『山崎御仮屋文書』『宮之城町史』p 213 2000 宮之城町
 - 35 註20 p 166
 - 36 「薩藩御城下絵図」鹿児島県立図書館蔵『黎明館常設展示解説図録』p 51 1996